日出ずる「丹ノ元」

三代目　東核芒種大伝道師
加古藤市

十三示元津・三界の萬霊

正義と良心の塊(かたまり)であります宇宙産十三示元津(うちゅうじゅうさんじげんかい)は、日輪太陽界を中心として、大正(だいしょう)腑天(ぶてん)神(じん)の熱田ノ神「天(あま)照(てらす)皇(すめら)大(おお)御神(みかみ)」の施津(せかい)で御座います。

その施津(せかい)は、嘘(うそ)偽(いつわ)りの許(ゆる)されない霊(れい)神津(しんかい)であり、その十三示元津(じゅうさんじげんかい)を三津(みっつ)にお分けになり、太陽(たいよう)霊(れい)神(しん)理氣津(りきかい)に丹(たん)と芒種(ぼうしゅ)のエネルギーを、練(ね)り阿(あ)弥生(みう)産出(みだ)させになり、太陽の周りの日輪界に留め置かれ、太陽の真光を諸(もろ)に受け留(と)めさせになり、互いに激(はげ)しく照り輝き返し合わせ、激しく高まり来る熱気を以って、日輪太陽界を熱い田(でん)とされ賜(たま)い、生命遺伝子の源(みなもと)と成る根(もと)を創(つく)り出す為に、滾(たぎ)り来る太陽の真光(まひかり)と丹と芒種(ぼうしゅ)のエネルギーとを、更に激(はげ)しく反応(はんのう)させになり、真光(まひかり)と芒種(ぼうしゅ)のエネルギーとが、渾然(こんぜん)一体(いったい)に吸収(きゅうしゅう)吸着(きゅうちゃく)しあい、「親光(しんこう)」となり、その親光(しんこう)を丹が、何時(いつ)でもどこでも吸着する事が出来る亢進(こうしん)状態(じょうたい)を創(つく)り出す事が出来たのが、日輪太陽界でございます。

この日輪太陽界でお活動氣(はたらき)になられた、九氣九神の霊(れい)神(しん)理氣(りき)を、九条の神熱田ノ神と名付け、その祭りを生産(しょうぶ)祭(まつ)りと定められ、生命界「第一の神」と示し置かれたので御座居ました。

続いて亢進(こうしん)状態(じょうたい)になっている丹(たん)を、太陽の真光と芒種のエネルギーとが、渾然一体の霊(れい)神(しん)理氣(りき)になった親光(しんこう)に導かれ、十三示元津の最(さい)果(は)ての施津(せかい)「宇宙産迂迦(うちゅううが)」の障壁賀津(しょうへきがかい)の中にあります天王(てんのう)平(びら)に、宇宙産十一示元津にて発生させられた「生(しょう)」が集められていて、「丹(たん)」が親光(しんこう)に導かれ「生」と結合なし、丹生(にしょう)丹生(にゅう)魂(こん)遺伝子(いでんし)が憑軀(つく)子(し)されて、植物・動物・人間の元姿が顕現(けんげん)された丹生津(にゅうつ)の神を「第二の神」と定め置かれたので御座居ました。

更に生命と誕生させる為に、宇宙産の六示元津に存在する月津(げっかい)に、丹生(にしょう)丹生(にゅう)魂(こん)をお運びになり、伊勢(いせい)生成(いなり)の霊(れい)神(しん)理氣(りき)と丹生(にしょう)とが結託(けったく)なし、雄(お)蕊(しべ)と雌蕊(めしべ)・雄(おす)と雌(めす)・男と女に区分けされた生命(せいめい)継承権(けいしょうけん)憲(けん)邪(じゃ)を「第三の神」伊勢の神と示し置

かれたので御座居ました。

即ち、第一の神(しん)霊理氣(れいりき)に、太陽の真光(まひかり)と丹(たん)と芒種のエネルギーを、熱田ノ神とお祀りされ賜い、第二の神(しん)霊理氣(れいりき)に、植物・動物・人間の丹生(にしょう)丹生(にゅう)魂(こん)遺伝子(いでんし)を、丹生津(にゅうつ)ノ(の)神(かみ)とお祀りされ賜い、第三の神(しん)霊理氣(れいりき)に、伊勢(いせい)で生成(いなり)の生命(せいめい)遺伝子(いでんし)を伊(い)勢(せい)ノ(の)神(かみ)にお祀りされ賜いたので御座居ました。

又佛教で泰(たい)澄(ちょう)大師(たいし)は、第一の佛理氣(ぶつりき)を、太陽の真光(まひかり)「親光(しんこう)」と「丹(たん)」と「芒種(ぼうしゅ)のエネルギー」を、三所(さんしょ)大権現(だいごんげん)とお祀りされ給い、さらに総ての生命の源となる生を発生あそばされた、宇宙産十一示元津を、十一面観世音菩薩像を以って現しになられたので御座居ました。

そして、その十一面観世音菩薩の胸に、人類として一番最初に御降臨(ごこうりん)になられた、初代伊邪那(いざな)岐(ぎ)尊(のみこと)の両手を胸に合掌させになり、初代伊邪那(いざな)身命(みのみこと)の両手の指をお腹の上で組み合わせになり、神(しん)霊(れい)の命(めい)により、生産(うみ)育(そだ)てられた三十八名のお子の姿を一本一本の手で現(あらわ)され、右側に十九本の手を以って男子十九名のお子を現(あらわ)され、左側に十九本の手を以って女子のお子十九名を現された十一面(じゅういちめん)血(せん)種(じゅ)観世音(かんぜおん)菩薩像(ぼさつぞう)として、人類のご先祖(せんぞ)大祖人(だいそじん)の御姿を現されたので御座居ました。

この人類の大祖人初代伊邪那(いざな)岐(ぎ)尊(のみこと)が童児の時の事に、吉野山にお登りになり、青(あお)根ヶ峯(ねヶみね)の山頂にて、宇宙産十三示元津(うちゅうじゅうさんじげんかい)に御座います障壁賀(しょうへきが)の中の天王(てんのう)平(びら)にあります天(てん)の意(い)和戸(わど)を出られる時の事を想いだされ、その青根ヶ峯に三津の霊石を並べ置かれ、丹生津(にゅうつ)の霊(れい)神(しん)理氣(りき)とお祀りされた祭り場を、天武天皇(てんむてんのう)が破壊(はかい)されたを境にして、役(えん)の小角(おずぬ)が三(さん)大蔵王(だいざおう)権現(ごんげん)として現され、今も吉野山の蔵王堂(ざおうどう)にお祭りされています。

さらに空海(くうかい)弘法大師(こうぼうだいし)は、丹生津(にゅうつ)にて植物・動物・人間の丹生(にしょう)丹生(にゅう)魂(こん)遺伝子(いでんし)が憑軀(つく)子(し)された遺伝子を、生命遺伝子にお変えになり、この生命界地球に伝えられた生命(せいめい)継承権(けいしょうけん)憲(けん)邪(じゃ)を、三(さん)大太(だいだい)元帥(げんすい)明王(みょうおう)として伝え遺(のこ)されたので御座居ました。さてこの生命界地球の何処に、この生命(せいめい)継承権(けいしょうけん)憲(けん)邪(じゃ)・三(さん)大太(だいだい)元帥(げんすい)明王(みょうおう)さまが、地球の何処(どこ)に御降臨になられたで御座いましょうか・・・?

その場所を伝えているのが、日出ずる「丹ノ元」初めの国、日本で御座います。その初めの国日本国には、神佛の霊(れい)神(しん)理氣(りき)に従い通すと言う意味を持つ御難(ごなん)賛助(さんじょ)の御誓約(うけひ)という詞(ことば)があり、例(たと)えどんなに苦(くる)しく辛(つら)くとも、互いに話し合い共に賛助し合い、争い戦いは絶対に致さぬを誓い、宇宙産(うちゅう)霊(れい)神(しん)理氣(りき)と約束しているのが、御難賛助の御誓約で御座います。

従って、その御誓約(うけひ)を違(たが)え、神佛に背(そむ)いた時は、自らして、腹を切り申し開きをすると言う厳(きび)しい仕(し)来(きた)りのある国が、初めの国・日本国で御座います。それ故に、神風の起きたときもありましたが、明治の権力者は、御難(ごなん)賛助(さんじょ)の御誓約(うけひ)に背(そむ)き、意のままに成らぬ孝明天皇を暗殺して、意のままになる天皇を勝手に擁立(ようりつ)し、その天皇を神に祭りし立(た)て上(あ)げて、神の名の基(もと)に国民を騙(だま)し、日本の国民の為でもなく、世界の平和の為でもなく、自我の欲望権力の為に、次々と侵略(しんりゃく)戦争(せんそう)を繰り返した罪科(ざいか)に依って切腹しなければ成らぬ身の上であれば、米国・イギリスとも和睦(わぼく)できず、終には神の国・国民を騙し神風特攻隊を飛ばしたり、人間(にんげん)魚雷(ぎょらい)を出撃させ、多くの若者の命を犠牲にしたにもかかわらず、国民も目覚める事なく、さらなる戦争に突進して行ったのでありました。

そんな昭和二十年四月十二日の事に、天津(あまつ)神(かみ)と国津(くにつ)神(かみ)の「神祇の神の裁定」が米国のルーズベルト大統領と、日本国の昭和天皇と中国の蒋介石閣下に神祇の神の大(おお)御意志(みごころ)が下されたので御座居ました。

その大御意志とは、「ここまで戦争をすれば生物(せいぶつ)・生氣物(いきもの)人間に、何の益も無い事がわかったでありましょう。」と、仰せになり、米国の大統領に、「一度使用して仕舞えば引き込める事が出来ず、後の始末に困るような原子爆弾の製造を直ちに止めて、日本国の天皇と話し合うがよいでありましょう」と仰せに成られたので御座居ました。

すると大統領は、「ここまで来た製造を中止する事は出来ず、一日も早く完成させて、日本国に投下させねば成らぬ」と神祇の神の裁定を退(しりぞ)けになれば、神はその場で大統領の命(いのち)を召(め)されたので御座居ました。

続いて日本国の天皇に、「今、日本国が進めている原子爆弾の製造を中止させ、連合国に話し合うが良いでありましょう」と仰せに成れば、昭和天皇は直ちに杉山元帥を宮中にお呼びになり、日本国の原爆製造を中止させ、連合国と話し合おうと想えども儘(まま)ならず堪(こら)えてお見えでした。

中国の蒋介石閣下には、「後日の世界平和の為に、日本を許して置きなさい」と仰せに成れば、蒋介石閣下は、「あれ程残酷(ざんこく)非道(ひどう)な日本国を許すなぞ、神の御意志(みこころ)の程を理解する事は出来ません。」とお断りになり、よくよく考えてみれば、間もなく日本国が降伏(こうふく)した後に来るのが、世界を東西二つに分けての思想(しそう)戦争(せんそう)を、中国を二分したのでは中国の為にならずと想えた時に、神祇の神の大(おお)御意志(みこころ)が解(わか)り急いで中国を統一するのには、今、私が日本国を許せば、中国は直(ただ)ちに一つになる事が出来ると想い、日本国を許す為、長崎に原子爆弾が投下された直後に、重慶(じゅうけい)より連合国のアメリカとイギリス・ロシアに打電され、「ポツダムで連合国が取り決めた日本国の四(よん)分割(ぶんかつ)占領(せんりょう)には従わず、天皇のことは、日本国国民自身が決める事であり、その事を言う事は、既(すで)に侵略(しんりゃく)である。」と伝えられたので御座居ました。

それでも日本国の権力者は、自国の国民を救う意志(こころ)はなく切腹に変えて、世界で一度も使用した事のない原子爆弾が広島・長崎に投(とう)下(か)されると言う憂(う)き目に晒(さら)された

のですが、日本国の権力者は権力を死守(ししゅ)する為の本土決戦を唱えるばかりでありました。
このような有り様の中に昭和天皇は、日本国国民を救う為に、総ての戦争責任を一身(いっしん)に担(にな)われて、昭和二十年八月十五日を期して、戦争終結の詔勅(しょうちょく)を発せられ、連合国に無条件降伏をされたので御座居ました。
その昭和天皇の御意志(みこころ)の内は、権力に依って神に仕立てられて口(くち)を諷(ふう)じられた天皇の名の元(もと)に、戦争(せんそう)追行(ついこう)の任(にん)にあてられた権力者には、言い伝えたき事は山ほどあれど、万難(ばんなん)を廃(はい)して、二度と戦争を仕(し)無(な)い誓いを胸に、これから先、日本の国を如何(いか)にすば良いかを、神佛「皇祖(こうそ)皇宗(こうそう)の御霊(みたま)」におすがりに成られたので御座居ました。
すると皇祖皇宗の御霊(みたま)は、二度と戦争を仕(し)無(な)いを条件に、日輪太陽の九氣九(くきく)神(しん)「九条熱田の神」に産(む)霊(すび)をされたので御座居ました。するとその時、日本国民の総てが昭和天皇の御意志(みこころ)に従い申上げ、不戦をお誓いした為に、昭和天皇は、昭和二十一年三月五日に、総理大臣を宮中にお招きになられ、次のように勅語(ちょくご)を下賜(かし)されました。

日本国民が正義ノ自覚ニ依リテ、進ンデ戦争ヲ抛棄シテ、国民ノ總意ヲ基調トシ、憲法ニ根本的ノ改正ヲ加ヘ、政府当局其レ克ク朕ノ意ヲ體シ必ズ此ノ目的ヲ達成セシムコトヲ期セヨ

と、仰せになり、皇祖(こうそ)の御霊(みたま)と九条「熱田ノ神」との御誓約(うけひ)を果たされたので御座居ました。
此の事を無にして戦争責任を負い、切腹をしなければならぬ者が、責任(せきにん)逃(のが)れに「連合国が押し付けた憲法であるから、改定しなければならぬ」言い出した者、特に此(こ)の度(たび)の安倍総理に至っては、美しい国造りの為に、改憲(かいけん)を唱えたのでは、正に切腹者(せっぷくもの)の総理で御座います。
ここで国民が此の総理を辞(や)めさせねば日本(にほん)国民(こくみん)総切腹(そうせっぷく)の神罰(しんばつ)、核戦争の戦場と成る日が目の前に迫ってきています。
神(しん)佛(ぶつ)の一番お嫌いなのが「恩(おん)を仇(あだ)で返(かえ)す」ことです。
今の日本国政府が仕手いることが、大恩を仇で返していると同じ事をしているのです。
戦前に日本国が中国にした行為に対し、中国が日本にしてくれた行為は、「連合国で決めた四(よん)分割(ぶんかつ)占領(せんりょう)に反対して、天皇の事は日本人自身の決める事であると言い、その事すでに侵略(しんりゃく)である。」と唱え、連合国で決めた中国への十九兆円の賠償(ばいしょう)金(きん)も放棄(ほうき)してくれた中国を、仮想(かそう)敵国(てきこく)とすることは許されないのです。
それも、明治二十七・八年の日清戦争を皮切りにして、朝鮮半島を支配して来た日本国と、昭和二十四年の後半から二十五年の前半に掛けた、米国の朝鮮戦争を以って追(お)い詰(つ)めた、北朝鮮問題を口実(こうじつ)として、日米安全保障のためといって、日本国列島を、米国の基地化を進め

る事は、日本の国の安全には成らないのです。

もし、日本国の隣国の国々が、日本列島を米国の核の傘の下(した)の核(かく)基地(きち)と想う時に、日本列島を捨て置けなくなる時と、日本人が御難(ごなん)賛助(さんじょ)の御誓約(うけひ)に背(そむ)いた罰(ばつ)により、総切腹(そうせっぷく)しなければ成らぬ時とが重なる時が、「第三次世界大戦」核戦争の戦場と日本列島が成る時であります。

一度(いちど)　「二度と戦争をしない」と世界に誓った国が、憲法第九条を改定して、戦争の出来る国と成ることが、「美しい国に成る」と言えるでしょうか・・・？

悪い国に成ると全世界に言明している様なもので、世界のどこの国が日本国を信用できるでありましょうか・・・。靖国神社に参拝する事は悪い事ではなく、憲法第九条の改定を胸に参拝する霊魂(たましい)が許されないのです。

靖国神社参拝問題で揺(ゆ)れる近隣諸国に、納得していただき、世界の信用を取り戻すために、今の日本国は、全世界の戦争(せんそう)殉難(じゅんなん)死(し)された総ての御霊魂(みたま)をお祀りする世界平和神宮院を、日本武尊が民草和氣(くさなぎ)の剣(つるぎ)を納められた地、熱田神宮の元宮、尾張族が伊勢の神をお祀りされた、愛知県名古屋市緑区大高町日神山地内に建設為(な)し、竝宮(ならびのみや)として日本国憲法第九条の生産(うみ)親(おや)であります、昭和天皇をお祀りする昭和神宮を、今上陛下の名の下に建設して、日本国憲法第九条を以って、全世界の信用を取り戻して行く時に、真の世界平和が始まる時が来るので御座います。神佛の御啓示に従い申上げました。

畏

平成十九年一月二十日